ヴァルハラにて

お冨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴァルハラにて

【Ｎコード】
Ｎ０４５８Ｐ

【作者名】
お冨

【あらすじ】
ヤンとラインハルトが、ヴァルハラで二度目の会談を実現した時。騒ぎが起こらないはず、無いですよ。

「遅い。何をしておるのだ」
氷蒼色の瞳をきらめかせて、皇帝ラインハルトがいらだたしそうに言った。ヴァルハラの帝国町の新人用アパートの一室である。
ここでは、生前の身分など関係なく到着順に部屋が割り当てられている。希望者はリストに登録して生れ変わる順番を待つことになるのだが、ラインハルトには、その前に会っておかねばならない人物がいた。
「ラインハルト様、そうお焦りになりますな。必ず連絡があります」
見事な赤毛の長身の青年が、我儘な子供をあやすような口調で言った。
「相変わらず、兄貴面をするのだな。キルヒアイス。今は、俺の方が年上なんだぞ」
リストの登録を保留してラインハルトを待っていたキルヒアイスが、クスクス笑いながら答える。
「どうせなら、御老人になられてからいらっしゃればよろしかったのに。そうすれば、一目でどちらが年上か分かりましたものを」
すねた顔をして、ラインハルトはソファーに腰を下ろした。それが合図だったかのように、テーブルの上のヴィジホンが鳴った。ラインハルトの手がのび、スイッチを入れる。
「我が皇帝」
一瞬、ラインハルトの顔に複雑な表情が走った。画面に映ったのは、オスカー・フォン・ロイエンタールの有名な金銀妖眼だった。
「久し振りだな、元帥。今、どこにいる」
「は、同盟町のはずれです。ヤン・ウェンリー提督とそちらへ伺いたいのですが、お許し頂けますでしょうか」

すがるような気持ちで返事を待つロイエンタールに、ラインハルトは堅い表情のまま頷いてみせた。
「良かろう。待っている。いつこちらへ来るか」
「は、一時間後には」

ほっとして、ロイエンタールはヴィジホンを切った。皇帝に拒絶されたら、直ぐに生れ変わって全ての記憶を捨ててしまうつもりだった。それは、オスカー・フォン・ロイエンタールという自我が消滅してしまうことを意味する。
「良かったですね」
自分のことのように喜んだのは、ヤン・ウェンリーだった。彼も、リスト登録をしていない一人である。仲間達や妻と養子の行く末を確認するまでは、自我を捨てて生れ変わる気になれないでいた。ヴァルハラからは、現世の様子をうかがい知ることはできない。新米の移住者から、話を聞くしかないのだ。
「しかしまあ、これ程早く皇帝ラインハルトと御対面できるとは思っていませんでしたな。喜んで良いやら、悪いのやら」
ワルター・フォン・シェーンコップがシニカルな笑みを浮かべて言った。周囲には、ヤン・ファミリーの面々が揃っている。彼等も、ヤン・ウェンリーの側を早々に離れる気はない。
「では、行きましょうか」

イワン・コーネフが、一同の乗り込んでいる同盟軍シャトルを発進させた。シバァ星域会戦の折り、大量に破壊されてヴァルハラへやってきたものの一つだ。
エドウィン・フィッシャーが航路の算定をしてくれているので、万が一にも迷子になる心配はない。フョードル・パトリチェフとルイ・マシュンゴの二人の巨体のお陰で、ずいぶん狭苦しい感じになったが、仕方あるまい。
ローゼンリッターの千人をこすメンバーも同行したがったが、帝

国町におじゃまするのだから、あまり大袈裟にしたくないとのヤンの意向で、代表としてライナー・ブルームハルト一人が参加していた。なにしろ、彼は直接ヤンのお供でヴァルハラへ来たという優先権がある。

「メルカッツ提督は、帝国町の方におられるのでしょうか」
ヤンが、わざわざ迎えに来てくれたロイエンタールに尋ねた。
「そうです。もっとも、直ぐに生れ変わられて行かれましたが。もう、思い残したことは何もないとおっしゃってましたな」
「そうですか」
ヤンはいささか残念に思った。尊敬するローザス提督もビュコック提督も、ヤンが来る前に生れ変わってしまっていて、お目にかかれなかった。充実した人生を送って充実した死を得ることがかなった人々が羨ましく思える。いつまでもヴァルハラに未練がましく残っているのは、不幸なことなんだろうかと考えてしまう。
「地上では、平和のお陰でベビーブームが起きていて、今ならリストに登録しさえすれば、即日生れ変われるそうですよ。もし、登録なさるんでしたら、私もご一緒させてください」
コーネフが真面目な顔で言った。たちまち賛同の声が起こり、ヤンは憮然とした。
「自分のことは自分で考えるべきだよ。死んでからも、当てにしないでくれ」
「自分で決めたんですよ。貴方にどこまでもお供するってね。こいつは立派な自由の行使ですな」
イゼルローンの不良中年がうそぶく。ヤンは愛用の黒ベレーに向かって、溜め息をついた。

「ほら、戦艦が見えてきましたよ」
コーネフの声に、一同はスクリーンに目をやった。
「いやあ、すごいなあ」

ヤンが率直な感嘆の声をあげた。そこには、百五十年間に及ぶ戦乱で破壊された艦艇が、元通りの姿で集積している。山のようというより、ちょっとした惑星ぐらいの規模と質量がある。

他の人工機器とちがい、宇宙空間で寿命を終えたそれらは、再生利用されることがなく、したがってヴァルハラから消滅することもない。中心に行くほど年代が古く、一番外側には、シバァ会戦でこちらにきた艦が、数千隻単位で積み重なっているのだ。

「提督、あれ、ヒューベリオンじゃないですか」

さすがにコーネフは目が良い。僅かな特徴から、かつてのヤンの旗艦を識別すると、その脇をかすめるようにシャトルのコースをとった。

「ほんとだ。懐かしいなあ」

ロイエンタールが苦笑した。

「わたしにとっては、ずいぶん憎たらしい存在ですな」

「そうでしょうな」

シェーンコップが、彼にしては穏当な台詞をはいた。

「そろそろ、帝国町です」

フィッシャーが落ち着いた声で言い、一同はスクリーンに目を戻した。

☆☆☆

「ようやくヤン・ウェンリーとじっくり話ができるな」

ラインハルトは上機嫌である。同盟随一の智将の来訪と聞いて、

ラインハルト麾下の提督達も顔を揃えていた。主なメンバーだけで、オーベルシュタイン、ケンプ、レンネンカンプ、シュタインメッツ、ファーレンハイト、ルッツという豪華さである。中将、少将級に至っては、数え切れない。

「参りました」

ロイエンタールの幕僚であったベルゲングリューンが、空の一角を指し示した。少しも危なげなくシャトルは着陸し、まず、案内役のロイエンタールがおりたった。

「ごくろうさまでした。元帥」

キルヒアイスがこだわりのない声を掛け、お陰でラインハルトは気まずい思いで挨拶をせずにすんだ。ロイエンタールとは、後でじっくり話す必要がある。さっさと生まれ変わりを選んだグリルパルツァーのことも話さなければ。

ついで、不敵な面構えの同盟の軍人達が降りてきた。どの顔も有能そうである。いよいよヤン・ウェンリーのお出ましとなって、帝国軍の将官達は緊張した。そして、次の瞬間、一斉に口をぽかんと開けてしまった。シャトルの出口でつまずいたヤンが、慌ててバランスを取ろうとしてそのまま足を踏み外し、長くもないタラップを転げ落ちたからである。

「あいたたたた」

厳粛たるべき雰囲気を見事にぶちこわしてしまったヤンを、シェーンコップが腕を取って立ち上がらせた。

「ちゃんと足元を御覧になるんですな。まったく、子供でももうすこし注意しますよ」

さすがに顔を赤らめたヤンは、ラインハルトの方に向き直ると、精一杯丁寧に敬礼した。黒と銀の軍服を着込んだ男達が、比べものにならないほど規律ある厳格な答礼を返した。後ろのほうで、小声のささやきが起こった。

「この男が本当に奇跡のヤンなのか？」

大多数の者は、ヤンに初めて会ったので、そう思うのも無理はない。なにしろ、帝国軍内のヤンの評価は、本人を直接知らないだけに、同盟軍内部よりはるかに美化されていたのだ。ところが、実物ときたらどう見ても軍人には見えない。

もともと若いが、貫禄のないことといったら、それ以上である。はっきり言って、彼の随員の中で、一番の下っ端に見える。せいぜい大尉というところか。それでも、階級が高すぎるような気がする。元帥には、逆立ちしても見えない。

「イゼルローン回廊では、せっかく会見のお申し込みを頂きましたのに、参上できず失礼致しました。ようやくお目にかかれて、嬉しく思います」

「余も同様だ。卿が余を置き去りにしてからは、寂しくてたまらなかった。ようも、余に全てを押し付けてさっさとヴァルハラへ引っ越してくれたものだ」

いささか非難めいたことを口にして、ラインハルトはヤンに近付くと、右手を差し出した。

「もはや我らが争うことはあるまい。友になってくれぬか」

ヤンに否やのあるはずがない。地上では、ついに不可能であった両者の握手が成立した。とたんに賑やかになったのは、ヤン・ファミリーの面々である。

「いやあ、良かった、良かった。おめでとうございます、提督」

「めでたい。くたばれ皇帝と言えなくなるのが、ちょっとばかり残念ですね」

「なーに、喧嘩がしたけりゃ、いつでもできるさ。艦はいくらでもあるし、盛大な花火ごっこをしたって、もう、誰も死なないんだから、思い切り楽しめるぜ」

「ちょ、ちょっと待った。なんで話がそっちのほうにいくんだ」

ヤンが慌てて口を挟んだが、それぐらいでおとなしくなるようなメンバーではない。てんでに言いたいことを言って、盛り上がって

いる。
「伊達と酔狂で喧嘩してどこが悪いんです。戦争よりスケールが小さくなって、可愛いでしょう」
「そうですよ。いくら真面目になったって、いまさら帝国の真面目さにかなうわけないでしょうが。俺達は心意気とチームワークで勝負なんだから」
「だけどね……」
「提督は黙っててて下さい」
「でも、戦争は良くないよ、フライングボールの親善試合ぐらいが穏当じゃないかい」
ヤンの提案に、それまで面食らって言葉もなかったラインハルトが賛同の意を表した。
「それは面白そうだ。ぜひ、正式に開催しようではないか。スポーツであれば、五分と五分の勝負が出来よう」
一同の最年長者であるフィッシャー中将が、落ち着いた声で総括した。
「決まりましたな。具体的な事は後で詰めるとして、さあ、提督、皇帝陛下と帝国軍の皆さんにご挨拶をなさって下さい」
「そうでした。皆さんをお待たせして、申し訳ありません」
ヤンはラインハルトに謝ると、連れ立って、帝国軍のそうそうたるメンバーの前に進んだ。
「はじめまして、ヤン・ウェンリーです。宜しく」
わずか二秒で挨拶を済ませたヤンに、改めて好奇の目が集まった。ヤン・ファミリーとは対称的に、こちらはあくまで規律正しい。式典の類いが大の苦手のヤンは、居心地が悪いこと夥しかった。
「卿に会えて、嬉しく思います」
少しも嬉しくなさそうに、上席者であるオーベルシュタイン元帥が言った。一人一人に紹介されたが、一度に全員の顔と名前を一致させられるほどヤンの記憶力は良くない。あっというまに誰が誰だか分からなくなってしまい、話しかけるときは相手の階級章だけが

頼りである。

ようやく形式ばった対面が済むと、場所を移して、ピクニック大会となった。なにせ、ヴァルハラにはホテルがないので、青空天井ということになったしだいである。

蛇足ではあるが、食べ物、飲み物の類いも一切ない。そもそも、死者には食欲が沸いてこないのだ。食べる楽しみを取り戻したいというのが、生まれ変わり希望の第一理由となっている程である。

草原の斜面にに並んで腰を降ろして、ヤンはラインハルトにユリアンの消息を聞くことが出来た。シェーンコップにブリュンヒルト突入までの詳細は聞いていたのだが、その先は彼にも分かるはずがなく、気をもんでいた。ヴァルハラに来なかった以上、生きていることは間違いないが、ひょっとしたら、重傷を負って生死の境にいるかもしれない。その可能性が大いにあったので、ヤンは心配でたまらなかったのだ。

「どうも、ありがとうございました。これで、肩の荷が降りました」

講和が成立し、ハイネセンとイゼルローンを交換する約束が交わされたと聞いて、安堵の溜め息をつくヤンだった。

「卿は不思議な男だな。先程の卿の部下の態度を見ても、とても、尊敬されているとは思えぬが。どうやって士気を最高水準に維持出来たのだ」

ラインハルトには、それ程きついことを言っているとの自覚はない。ヤンの方も、別に怒る気にはならなかった。尊敬されているとは、自分でも思っていない。

「どうしてでしょうか」

腕をくみ、真面目に考え込んでしまうヤンだった。

「ラインハルト様、大変です」

斜面の上から、キルヒアイス元帥が緊張した声を掛けた。

「乱闘が始まりました。急いでおいで下さい」

「なに」
素早く立ち上がったラインハルトは、後をも見ずに駆け出した。ヤンもえっちらおっちら走り出したが、追い付けるものではない。たちまち息を切らしまった。
やっと現場に着いたときには、騒ぎはとうに治まっていた。そこここに、大の男が伸びている。ラインハルトが氷蒼色の瞳で気絶を免れた面々をねめまわしている。
「なぜこういうことになったのか」
二十五歳の若者が、並み居る軍人達を威圧した。幾百万の部下を指揮するつわものたちが、恐縮し、答えを口に出来ずにいる。まさに、覇者にふさわしい貫禄である。
「……」
ヤンとはえらい違いだ。

「シェーンコップ、駄目だろう。騒ぎを起こしちゃ」
ヤンが、子供のいたずらの現場をおさえたような声で言った。
「心外ですな。私が騒ぎの張本人と決め付けられるのは」
「だって、そうだろう。違うのかい」
「いいえ、違いません」
やっぱりと言いたげに、ヤンはベレーで顔を扇ぎながら溜め息をついた。
「ここでも痛みは感じるんだから、駄目だよ。子供どうしじゃないんだから、もっとおとなしいスキンシップの方法があるだろう。そんなに喧嘩したいんだったら、さっさと地上へ生まれ変わるんだね。ヴァルハラは平和でなきゃ」
「だれが決めたんです。天使ですか、悪魔ですか。どちらも見掛けたことはありませんが」
咄嗟に返答できずにいるヤンに、ブルームハルトが助け船を出した。
「済みません。多勢に無勢で、手加減する余裕がなかったんです。

以後気をつけます」
「頼むよ」
それだけ言って振り向いたヤンは、ラインハルトをはじめとする帝国の面々が、呆れた顔で自分に注視しているのを発見することとなった。
「あ、どうもすいませんでした。以後、気をつけさせます」
そう言って、ペコリと頭を下げた。ラインハルトは鷹揚に頷いたが、納得しがたいものを感じている様子だった。

「シェーンコップといったな。卿はヤン・ウェンリーのことを上司と思っていないのか」
幾分、非難めいた口調である。もし、彼がラインハルトの部下であれば、不敬罪と不服従で断罪する所だ。
「とんでもない。ヤン・ウェンリーは本官にとって、最高の上司です。他の人間の命令なんぞ、聞く気になれませんが、提督だけは例外ですな」
「ほう、その理由は」
ラインハルトの口調に、皮肉は含まれていない。純粋に、疑問を口にしただけである。
「なにしろ、ヤン・ウェンリーほど、言いたいことを言わせてくれる上司はおりません。才能と運も有り余っているし、部下を死なせずにすむ楽な勝ち方を考えてくれます。ま、もう、これ以上死ぬことはありませんがね。おまけにこの人物を相手にしていると、常に優越感に浸れます。平時の軍人としては、完全な落第生ですから」
シェーンコップが不敵に言い放った。
「なるほど」
真剣に頷くラインハルトに、キルヒアイスが言った。
「負傷者の手当てをお許し下さい。地面に寝かせたままでは、起きたときに痛みが残りましょう」
「ほうっておけ、と言いたいところだが、まあ、良いだろう」

ヴァルハラでは、どんな怪我をしようと、ぐっすり眠れば疲れがとれるように、目を覚ましたときには治癒してしまうのである。キルヒアイスの言った通り、痛みが残ることはあるのだが。

ヤン・ファミリーで気絶していたのはフィッシャー中将一人だった。それに対し帝国側は、上級大将以上は無事だったものの、かなりの人数がダウンしていた。それがラインハルトには面白くない。いつもいつも、少数のヤンにしてやられるばかりではないか。

「私が居合わせたら、真っ先にのびてましたよ」

ヤンは笑いながら断言する。

「余なら、卿の部下を全員倒していただろう」

ラインハルトが気負うことなく言い、腑甲斐無い部下を睨み付ける。

こうして、多少荒っぽい相互理解を果たしたのち、今度は、帝国側が同盟町を訪問することに話がまとまった。それまでにフライングボールのコートを用意する約束もできて、ヤン・ファミリーの一行は、帰路についた。今度はちゃんと足元を見ていたので、ヤンはつまずかずにシャトルに乗り込めた。

「あれが民主主義と言うものなのか。どう考えても、秩序ある状態とは言えぬと思うが」

「少なくとも、軍隊組織は解体しているのではないか。どう見ても、あれは上官に対する態度とは言えまい。シェーンコップとやらが口にしたことは本心なのだろうか」

ヤン・ウェンリーに対する評価を変更する必要に迫られた帝国軍の高級将官達が、額をよせあって意見の交換を行っていた。はやい話が、井戸端会議である。

「どうやら、きゃつの引退生活は、擬態では無かったらしい。本官の勇み足でした」

あくまでも真面目な顔と声で、レンネンカンプが言う。

「しかし、同盟町では、未だに一万の兵士がヤン・ウェンリーの回

りを固めていると聞くぞ。ヤンが人望を失っているのなら、皆、生まれ変わるか、自分の身内のところへさっさと散っていくだろう」
「いや、俺の見たところ、十万人は下らないぞ」
ロイエンタールが人数を訂正すると、おおっという声があがった。
「まさに魔術師だな。我らが皇帝なら不思議はないが、あの、平凡以下の印象しかない男のどこにそんな魅力があるのだ」
シュタインメッツが真剣に考え込んだ。生前、彼は、ヤンの姿を見て、俺はあいつに負けたのかと憮然としたことがあった。すぐに、そんな考えが自分の敗因だろうと考え直したものだが、彼の部下の態度を見ていると、なんであんな男に負けたんだろうとの思いがぶり返してくる。
その思いは、ルッツも同じだった。まんまとイゼルローン要塞を再奪取されたとき、彼は全身の血管が焼き切れるかと思うほどの悔しさを味わっていた。時と共に、それは偉大な敵将たるヤンへの敬意に昇華された。されたはずだったのだが……本人を見て、ぐらついてしまっている。
「どうも分からん。あのペテン師の正体が掴めん。あの男の真の姿を見てみたい」
唸るようなファーレンハイトの言葉は、一同の思いを代弁したものだった。

☆☆☆

同盟町で行われた、第一回帝国対同盟親善フライングボール大会は、盛大なお祭り騒ぎとなった。フェザーン町からも大勢の見物客

がやってきて、ヴァルハラ始まって以来の大イベントを見逃すまいと意気込んでいる。公然と賭けが行われ、いやがおうにも盛り上がった。そもそもの発案者、ヤン・ウェンリーは、あまりに大袈裟になってしまったことに閉口していた。

参加希望者が多すぎるので、双方十チームずつ出場させることとなった。帝国側の優勝候補の双璧は、ラインハルトをキャプテンとする旗艦ブリュンヒルトクルーチームと、皇帝親衛隊チームだった。対する同盟側は、空戦隊チームと薔薇の騎士連隊チームが人気を集めている。

ヤン・ウェンリーは総監督を務め、ゲームには直接プレーヤーとしては出場しなかった。ま、彼の運動神経からすれば、妥当なところであろう。

公平をきすため、フェザーンの独立商人たちが審判を務めた。最初から白熱した試合展開となり、観客も選手も熱狂した。しかし、優勝チームが決定される前に、大会は中断してしまった。より白熱した戦いが、コート脇のベンチで始まってしまったからである。

それは、第七試合終了後の、休憩時間のことだった。ちなみに、この時点で、帝国の四勝三敗、ただし、総得点では、一一三対二一四で、同盟の圧倒的有利だった。掛け金の払い戻しの分配を巡って、論争が起きた所以である。

「どちらも、良くやっているじゃないか」

気持ち良い汗を拭きながら、ラインハルトがベンチに座っているヤンに話しかけたとき、友好的な雰囲気さえ漂っていた。これについては、多くの証言が一致している。

スポーツ全般に渡って不案内なヤンは、話題に窮してはいたが、決して不機嫌ではなかった。皇帝に敬意を表して用意されたおりたたみ椅子に腰掛けたラインハルトは上機嫌だった。

それが一天にわかにかき曇り、気圧が低下しはじめたのは、話題が戦略戦術論からバーミリオン星域会戦に及んだときだった。

「何を言う。あの時負けたのは余のほうだ。誰がみても疑問の余地はないではないか」
「お言葉ですが、私が負けたんです。敵の本拠地と主力部隊を分断して、個別に攻略することは、古来からの優れた戦法であって、なんら恥じることはありません」
「それは、余の功ではない。余は、戦略において卿の挑発にのり、戦術において完敗した。余は卿に負けたのだ」
一般には、温厚な紳士と思われているヤンだが、目上の相手に対しては、遠慮する必要を覚えないと言う面憎い一面をもっていた。この種の可愛げのなさはラインハルトと共通するものであったのだが、ラインハルトには、もはや盾突く上位者は存在していない。ヤンは個人的にも、ラインハルトを自分の上位者として認めていたので、
遠慮なく噛み付いていった。
「部下に、ハイネセン占領の可能な位置を占めさせたのは貴方です。戦略においては、偶然とか運などと言うものは存在しません。まして、戦術的勝利など、戦略目的を達成できなければ何の意味もありません。私が負けたんです」

第三者から見れば、滑稽きわまりなかったろう。なにしろ、自分が勝ったと主張しているのではなく、負けたと主張しあって喧嘩しているのだから。
何時の間にか、二人の舌戦は、試合の取材にきていたジャーナリストのマイクにのって、ヴァルハラ中に生中継されていた。
ここで、いささか複雑なシチュエーションが生じた。帝国軍人たちは、熱心にヤンの主張を支持し、同盟軍人は、ラインハルトの意見に同調したのだ。
互いに自分達の司令官を素直に応援できず、かと言って敵の肩をもつつもりはさらさら無く、複雑な思いにかられたのである。

そうこうしているうちに、二人の議論はエスカレートするばかりだった。回廊の戦いはもちろん、アスターテ、アムリッツァの戦いにまで遡り、互いに互いの成功した面を評価しあって、自分の敗北を主張したのだ。

「いい加減で、自分が勝ったと認めたらどうか、卿は意地っ張りだな」

ラインハルトが意地になって言いつのった。人類最大の覇者というより、むきになって喧嘩している少年の顔である。

「意地をはっておられるのは貴方の方です。結局、私は所属する国の滅亡を阻止できなかったのですよ。軍人として、最大の敗北じゃ無いですか」

ヤンもすっかり意固地になっていた。普段の彼なら、国家のためとかなんとか口にするのも嫌がっただろう。

「よし、それでは、決着を付けようではないか。余は、今度こそ卿に勝ってみせよう」

高らかな宣戦布告であった。

一瞬、静寂がヴァルハラ全体を支配した。

次の瞬間、「ジーク・カイザー、ジーク・ライヒ」の熱狂的な叫びが起こり、半瞬遅れで「くたばれカイザー」の大合唱が響きわたった。

もはや、フライングボールどころではない。ことの意外な成り行きに唖然としてしまったヤン・ウェンリーの回りで、興奮が飛び跳ねている。

そこへ、一時宿舎へ戻っていたキルヒアイスが、ようやく駆け付けてきた。

「ラインハルト様、これはどういうことです。いけません」

大声を出さないと、喧騒のなかでとても聞こえるものではない。

「皆をお静め下さい。開戦など、とんでもないことです。一体、どのような大義名分があると言われるのですか。ラインハルト様の個

人的感情を満足させるためなどとおっしゃられるおつもりですか」
「キルヒアイス提督のおっしゃられる通りです」
熱心に同意したのはヤンである。死んでまで、戦争などさせられては堪ったものではない。
「お前はどちらの味方なんだ、キルヒアイス」
ラインハルトが友の赤毛を引っ張った。
「私は、ラインハルト様の忠実なしもべです」
落ち着いたキルヒアイスの言葉が、ラインハルトを現実感覚溢れた統治者に引き戻した。かつて、キルヒアイスと別々にならねばならなかったのも、友の忠告を無視したからではなかったか。
「すまない。私が軽率だった」
ラインハルトはキルヒアイスにだけ聞こえる声で言うと、両手を広げ、辺りを押さえる身振りをした。たちまち静寂が戻る。ラインハルトの声が凛と響き渡った。
「ここに、余は、ヤン・ウェンリー元帥に、正式にシミュレーションゲームによる対戦を申し込む。受けてくれような」
ヤンがほっとした声で答えた。シミュレーションならば、遊びで済む。ラインハルトと純粋に智略を競えるのなら、望むところだ。
「お受けいたしましょう」
前にも増した熱狂が沸き起こり、細目も決まらぬうちから、賭札があっというまに売り切れた。
こうして、ヴァルハラ史上最大のエキサイティング・ゲームの火蓋が切られたのである。

長らくヤンの旗艦を務めた戦艦ヒューベリオンの艦橋で、帝国軍

の名将たちは居心地悪そうにしていた。これからヤン・ウェンリーの指揮で、彼等の主君と対戦するのである。ヤンの幕僚達は、すでにラインハルトと共に、ファーレンハイトの旗艦アースグリムに移っている。

事実上、戦闘に参加するのはこの二隻だけである。両方の戦術コンピューターを直結し、実際の戦闘と寸分たがわぬディスプレイを表示する……筈なのだが、なにしろ、初めての試みなので、どの程度再現できるものやら、やってみないことには分からない。

「どうぞ、よろしくお願いします」

コンピューター操作を受け持つオペレーター達に、ヤンは下手な帝国公用語で挨拶した。まったく、公平をきすために部下をそっくり入れ替えようなんて、誰が言い出したものやら。おかげで余計な気苦労が増えてしまった。

「すいません、誰か、通訳係りしてくださいませんか。いちいち言い換えていられなくなるでしょうから」

ヤンが頭を掻き掻き頼むと、

「本官が務めさせていただこう」

申し出たのは、なんと、オーベルシュタインだった。

「本官は、実戦指揮に向きませんから」

それだけ言うと、むっつりとだまりこんでしまう。白髪不気味面に横に立たれると、大抵の人間は戦意を喪失しそうなものだが、ヤンはいっこうに動ぜず、助かりますとだけ応えた。

与えられた六個艦隊を、ヤンはロイエンタール、シュタインメッツ、ルッツ、ファーレンハイト、ケンプ、レンネンカンプの指揮に任せた。キルヒアイス提督には、参謀兼、副官を務めてもらう。これだけの陣要なら、たとえ相手がラインハルトでも、勝てそうな気がしてくるから不思議だ。

一方のアースグリムでは、ラインハルトが額に忍耐という文字を張り付けていた。

「無理々々、中将に、艦隊指揮なんてできっこありませんよ」
「何を言ってる。こっちには、フィッシャーのおっさんと、グエン・バン・ヒューと、ボロディン提督にウランフ提督の四人しか艦隊指揮経験者はいないんだぞ。残りの二個艦隊、どうするんだ」
「だからって、しゃしゃり出ることはないでしょうが、この不良中年が」
「訂正していただこう。グエン・バン・ヒュー提督。本官は中年ではありませんのでね」
こいつら、本当にヤン・ウェンリーの部下なのか。このメンバーを率いて、ヤンは余に勝たせなかったのか。
ラインハルトは改めてヤンの凄さを思い知らされていた。
とにかく、艦隊指揮官が足りないのは事実なので、自身が二個艦隊を直接指揮するしかなかった。とりあえず、一番態度のでかいシェーンコップに副官と参謀役を割り当てた。今回は白兵戦になるはずもないので、彼の出番がないというのも理由の一つだ。
こうなってみると、いかに自分が部下に恵まれていたか、しみじみと感謝の気持ちがわいてくる。

「今回のシミュレーションは、余と卿等の司令官との決着をつける戦いである。卿等が実力を発揮せざるときは、ヤン・ウェンリーと余に対する屈辱と心得よ。余が望むは、全心全霊をかけた戦いである」
ラインハルトの蒼氷色の瞳が苛烈にきらめいた。さすがのヤン・ファミリーの面々も、すっかり飲まれている。シェーンコップでさえ、ジョークの一つも出てこない。
「敬礼！」
シェーンコップの号令に、一斉に右手が動いた。
これ程軍隊らしい引き締まった雰囲気が漂ったのは、彼等がヤンの下につどってから初めてではなかろうか。
「えー、みんな、そのままで聞いて下さい。成り行きでこんなこと

になってしまったけど、まあ、どうせシミュレーションだし、気楽にやろう。死者もでないし、怪我人もでないし、好きなだけ暴れていいよ。あんまりいい加減なことすると、後で皇帝に叱られるのが怖いから、手を抜かないように」

ヤンの口調には、妙に緊張感が抜けていた。のほほんとした表情には、戦いを目前にしていると感じさせるものは何もない。

さすがだ。悠然たるものだ。

帝国軍の提督達はそう思った。単に鈍感なだけとは考えない。そう考えたら、鈍感男にしてやられた自分達が惨めになるだけである。

「敵、接近して来ます。三時方向、数、およそ二万」

オペレーターが距離と相対速度を報告する間に、ヤンはよっこらしょと指揮卓に上り、片膝を立てて胡座をかいた。その行儀悪さに、さすがに驚きの視線が集まった。

「フォーメーションB、敵の一斉砲撃がありしだい、変形凹型陣型を取る」

ヤンの指示は、かつてバーミリオン会戦のおり使われた戦法だった。わざと側面攻撃をさせ、自分達が攻勢にあると錯覚させて、包囲網に誘いこむのである。勿論、同じ策に二度ひっかかるラインハルトではない。ヤンの方も承知の上だ。ラインハルトに側面攻撃をためらわせるのが目的である。

凡庸な指揮官には、とても理解出来なかったろう。内心、キルヒアイスは感嘆の声を上げた。もし、同盟が帝国と互角に戦えるだけの戦力を保持していたら、たとえ自分が生きていたとしても、ヤン・ウェンリーを押し止められたろうか。逆に帝国の方が滅亡していたかも知れない。

「ルッツ艦隊、シュタインメッツ艦隊、フォーメーション2。レンネンカンプ艦隊は三百光秒前進し、待機」

食事のメニューを注文するような口調で、ヤンは艦隊を配置していった。これだけの大兵力を指揮するのは初めてである。余裕があ

りすぎて戸惑ってしまう程だ。
　ラインハルトの方は、まどろっこしさを感じていた。部下の質が格段に劣る。よほど心してかからないと、ヤンはともかく、ロイエンタールやファーレンハイトにしてやられかねない。せめて、キルヒアイスがいてくれたなら。
「こころしてかかれ。ボロディン提督、ポイント４７からケンプ艦隊に向かえ」
　全身の細胞に心地好い緊張が走る。ラインハルトは、何より戦略面で相手を追い詰めてから確実な勝利を手にしてきた。しかし、彼の本質は戦略家というより戦術家であり、五分の兵力という実際の戦争では有り得ない状況に、かえって喜ばしさを感じていた。　一方のヤン・ウェンリーの本質は戦略家である。しかし、彼の才能は常に戦術家としての方面でしか発揮できないできた。唯一の例外がバーミリオン会戦であるが、その時でさえ、制約が多すぎて、自由な手腕をふるえたとはいいがたい。
　今回、十分な兵力を与えられて、彼は遺憾なく戦争の芸術家ぶりを発揮していた。

「ケンプ提督に連絡、軽く戦いつつ後退し、ポイント３４に敵をひきずりこめ」
　ボロディン艦隊を受け流させながら、傍らのキルヒアイスに話しかける。
「どうやら、皇帝は陽動をかけておいて、背後に回るおつもりのようだ。私でもそうするでしょうがね。五時方向じゃないかと思いますがいかがです？」
「ラインハルト様なら、そうなさるでしょう」
　キルヒアイスの言葉が終わらないうちに、オペレーターの声が響く。
「五時方向に敵影」
「そうら、おいでなすった」

ヤンは頭を掻き掻きロイエンタールに迎撃を命じた。ディスプレイをみつめながら、何事か考えている。
「おかしい。少なすぎる」
こいつも陽動か。
ヤンの頭脳は高速回転していた。次々と、一見何のためだか分からない指示を下していく。何もないはずの空間に配置されたファーレンハイトは、ヤンに十時方向への主砲総射三連を命じられて、訳も分からず従った。
驚いたのは、グエン・バン・ヒュー提督である。探知を避けるため、機関停止したまま、慣性で航行していたのに、鼻先を総射されたのだから。
「さすがはヤン・ウェンリー、読まれていたか」
こうでなくてはなと声には出さずに呟いて、ラインハルトは次の策に出た。とにかく、先に優位を確保してしまわないと、部下の質で負けてしまう。先制攻撃に出て、
それでやっと五分というところである。なにしろ、ヤンの用兵は柔軟で粘り強い防御を特徴としているのだから。
ヤンの方も負けてはいない。帝国軍の提督達にかなりの裁量権を与え、的確にラインハルトの攻撃を予測し、迎え撃つ。
どちらも相手の思惑を素早く察知し、対策を立てていくので、一見、乱雑な膠着状態としか見えない程だった。どちらの部下達も、自分のしていることの意味を悟った時には次の命令に従っている有様で、戦局全体を見渡すことは出来ないでいた。
かろうじてそれをなし得たのは、ロイエンタールとキルヒアイスだけであったろう。特にキルヒアイスは、ヤンがラインハルトのとるであろう次の行動まで予測してしまうことに、空恐ろしさを覚えていた。
ひょっとしたら、この男は、自分以上にラインハルト様のことを理解しているのかも知れない。
キルヒアイスの思いを知ってか知らずか、ヤンはベレーを脱いで

頭を掻き回しながら溜め息をついた。
「さすが、皇帝ラインハルトだ。こっちの思惑に乗ってこない。参ったなぁ。どうにも打つ手がないよ。こりゃ、負けるかなぁ」
司令官自ら士気を低下させるようなことを堂々と口にする。それでいて、危なげなく敵を退け、新たな作戦を指示し続ける。

いつしか戦局は、消耗戦の様相を呈していた。互いに決定的な損害を与えられぬまま、気の抜けない戦闘が、すでに二週間に渡って続いていた。実際の戦闘にあっても、そろそろ限界に近い状態であったろう。どちらも補給を重視し、物資の不足はきたさなかったものの、将兵の疲労が限界に達してしまったのである。具体的には、シミュレーションコンピューターのオペレーター達が伸びてしまったのだ。
ヤンからの停戦申し込みを、ラインハルトは苦い思いで受け入れた。またしても勝負はお預けになってしまった。悔しさが全身を駆け巡っていた。

☆☆☆

「今度のことで、良く分かった。ヤン・ウェンリーはまさに魔術師だ」
ロイエンタールの言葉に、一同は頷いた。二週間分の戦闘記録をコンピューターで解析しつつ、そうか、あの命令は、こういう意味があったのかといちいち納得していた彼等である。
「それにしても、戦闘になれば人が変わるかと思っていたが、相変わらずの外見だったな」

シュタインメッツが苦笑する。
「指揮卓の上で胡座をかくのが、妙に似合うのが不思議だな。二日目を過ぎた頃には、それが当たり前になっていたような気がする」
「同感、同感」
「不思議な男だ」
ヤン・ウェンリーに対して、もともと敬意をはらっていた彼等だが、どうやらそれ以上に親しみを感じてしまったようだった。

「あの金髪の坊やは、天才だな」
シェーンコップがやけに率直な言い方をした。かれにそうさせるだけのものが、ラインハルトには確かにあった。
「彼こそ、まさに英雄という名に相応しい」
フィッシャーが落ち着いた声で言う。パトリチェフが大きな顔で頷いた。
「まったくです。もし、ヤン提督が私の司令官でなかったなら、彼にひざまづいて忠誠を誓いそうな気がしてなりませんでした」
だれもパトリチェフを咎めようとしなかったのは、全員が同じ印象を受けていたからだろう。
「不思議なもんだ。ヤン提督の下で自由を謳歌していたいのに、あの坊やに忠誠を誓いたい欲求に駆られるってのはな。人間って言うのは、ヤン提督に限らず、矛盾のかたまりなのかもしれんな」
「どうしたんです、シェーンコップ中将、今日はやけに哲学しているんですね」
イワン・コーネフが穏やかにひやかした。
「たまにはそういう気分のときもあるさ。それより、われらが怠け者の元帥閣下はどうしているんだ。まだ昼寝から覚めないのか」
「寝かせといてあげましょう。ゲーム中は、ほとんど寝てなかったそうですから」
ルイ・マシュンゴが巨体に似合わぬ優しい声で言う。

「あの怠け者のどこにあれだけのスタミナがあるのか、いまだに分からんな。人間、なにかとりえはあるもんだ」
そう言うシェーンコップの声には、愛情がこもっていた。

こうして、ヴァルハラの一大イベントは終了した。それ以来、ひんぱんに帝国町と同盟町の間に交流が持たれるようになったということである。特に、シミュレーションに参加した名のある軍人どうしに友情が芽生え、互いの司令官を褒めあって、話題に事欠くことは無かったそうだ。
蛇足ではあるが、ラインハルト・フォン・ローエングラムとヤン・ウェンリーの間の、「どちらが負けたか論争」は、いまだに続いている。互いに相手を尊敬し合っているのに、どうやら、二人の間には、喧嘩友達以外の友情は成立しがたいもののようである。

まったく、
どちらも素直じゃないんだから！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0458p/

ヴァルハラにて

2010年11月21日10時25分発行